26

氏　　名	内山　由美子（ウチヤマ　ユミコ）
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2699号
学位授与の日付	平成23年11月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**Comparison of parameters of ^{123}I-metaiodobenzylguanidine scintigraphy for differential diagnosis in patients with parkinsonism : correlation with clinical features（パーキンソニスムの鑑別における^{123}I-metaiodobenzylguanidine シンチグラフィ指標の比較：臨床徴候との関連）**
主論文公表誌	Ann Nucl Med　第25巻　第7号　478-485頁　2011年
論文審査委員	（主査）教授　内山真一郎 （副査）教授　萩原　誠久，川上　順子

論文内容の要旨

〔目的〕

パーキンソン病（PD），レビー小体を伴う認知症（DLB）等のLewy body disease（LBD）は自律神経障害を高率に合併する神経疾患であり，パーキンソン症候群（PS）との鑑別にI-^{123} metaiodobenzylguanidine（MIBG）シンチグラフィが有用であるが，その診断能は報告により異なり，特に臨床症状との関連は明らかでない．本研究の目的は後方視的にMIBGシンチグラフィのLBD診断能およびMIBG指標と臨床症状の関連を明らかにすることである．

〔対象および方法〕

対象は2004年1月～2007年12月にMIBGシンチグラフィを施行し，6ヵ月以上の観察を行い臨床診断の確定したパーキンソニスム144例（男性73例，67±11歳）．MIBG 111MBqを静脈内投与15分（initial）および4時間（delayed）後に胸部正面プラナー像を撮像し，心臓縦隔比（H/M）および洗い出し率（WR）を計算した．医療記録をもとに調査した年齢，罹病期間等の臨床的特徴や，振戦，すくみ，幻覚等の臨床症状とMIBG指標の関連およびLBD診断に寄与する因子を解析した．

〔結果〕

97例がLBD（67±11歳，罹病期間5.3±4.4年），47例がPS（67±11歳，罹病期間3.3±2.6年）と診断された．LBDはPSと比較し，H/Mは低くWRは高かった（$p<0.0001$）．MIBG指標のLBD診断の感度，特異度は，initial H/Mが1.76以下で64.9%，87.2%，delayed H/M 1.89以下で78.4%，68.1%，WR 31以上で80.4%，61.7%だった．Initial H/Mは振戦（F value＝10.45），すくみ（F＝4.49），幻覚（F＝5.09）と関連した（$p<0.0001$）．臨床症状とMIBG指標の多変量解析では，LBD診断能にinitial H/M（F＝39.33）と振戦（F＝10.46）が関連し（$r=0.562$，$p<0.0001$），initial H/Mと振戦を組み合わせると，initial H/Mが1.76以下で振戦がある症例のLBD診断の特異度は95.7%に上昇した．

〔考察〕

約1/3のLBD患者はMIBG集積が正常で，MIBGシンチグラフィのみでLBD診断を行う際の限界と考えられた．Initial H/Mと振戦を組み合わせると診断能の特異度が上昇したが，PSでは一般的に振戦が伴わないためと推測された．振戦はMIBG取り込み低下が明らかでない症例の診断の一助になりうる．

〔結論〕

MIBG指標中initial H/Mが最もLBDの診断に有用で，振戦と組み合わせることで診断能は向上した．Initial H/M正常でLBDと診断，initial H/M低値だがPSと診断された症例では，今後注意深い経過観察が必要である．

論 文 審 査 の 要 旨

レビー小体病（LBD）（パーキンソン病とレビー小体を伴う認知症）とパーキンソン症候群（PS）の鑑別におけるMIBG心筋シンチグラフィの有用性を検討した．MIBGシンチを施行し，臨床診断の確定した144例において心臓縦隔比（H/M）および洗い出し率（WR）を計測し，臨床症状との相関を検討した．LBDはPSと比較し，H/Mは有意に低く，WRは有意に高かった．MIBG指標のLBD診断の感度，特異度は，initial H/Mが1.76以下で各々64.9%，87.2%，delayed H/M 1.89以下で各々78.4%，68.1%，WRが31以上で各々80.4%，61.7%だった．臨床症状とMIBG指標の多変量解析では，LBD診断能にinitial H/Mと振戦が関連し，initial H/Mと振戦を組み合わせると，initial H/Mが1.76以下で振戦がある症例でのLBD診断の特異度は95.7%に上昇した．結論として，MIBG指標中initial H/Mが最もLBD診断に有用で，振戦と組み合わせることで診断能は向上した．

27

氏　　名	中田元子（ナカタ モトコ）
学位の種類	博士（医学）
学位授与の番号	乙第2700号
学位授与の日付	平成23年11月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（博士の学位論文提出者）
学位論文題目	**苺状血管腫に対する早期レーザー治療の効果と合併症の検討―短パルス幅色素レーザーと皮膚冷却装置付き長パルス幅色素レーザーの比較検討―**
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌　第81巻　第4号　267-271頁　2011年
論文審査委員	（主査）教授　櫻井　裕之
	（副査）教授　川島　　眞，坂井　修二

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

苺状血管腫は，自然消褪が期待されるため，経過観察が行われることが多い．しかし，完全消褪しない症例や消褪後の瘢痕形成に対し手術を要する症例も少なくない．近年，パルス色素レーザーが開発され，乳児期から積極的にレーザー治療が行われるようになったが，有効性の報告がある一方で，色素脱失等の合併症が増加するとの報告も散見され，その有用性には未だ一致した見解が得られていない．今回，苺状血管腫に対する早期レーザー治療の有用性を検証するため，最初に開発された波長585nm，パルス幅0.45msecの第一世代パルス幅色素レーザーで治療した群（PDL群）と，その後開発された波長595nm，可変式パルス幅0.45～40msec，皮膚冷却装置付きの第二世代パルス色素レーザーで治療した群（LPDL群）の治療効果と合併症について比較検討した．

〔対象および方法〕

対象は，2001年から2009年の9年間に東京女子医科大学形成外科を受診した苺状血管腫を有する患児75例（PDL群25例，LPDL群50例）である．治療開始は生後120日以内とし，血管腫の増大傾向が止まるまで4週毎に照射を行い，その後は治療間隔を延長して，経過により適宜照射を追加した．評価項目として，血管腫が最大に隆起していた時期を判定し，合併症（色素脱失，色素沈着，質感異常，血管腫増大）の有無および治療効果を1歳時に判定した．

〔結果〕

最大隆起時期は，PDL群173.5日，LPDL群100.7日であり，LPDL群がPDL群に比し有意に短縮した．何らかの合併症を一つでも生じた症例は，PDL群12例（48%），LPDL群8例（16%）であり，LPDL群で有意に減少した．色素脱失を認めた症例は，PDL群8例（32%），LPDL群5例（8%）であり，LPDL群で有意に減少した．その他の合併症の頻度は群間で有意差は認めなかった．LPDL群に治療効果が高い傾向がみられたが，PDL群と